

薔薇のことば

目の前のこの小さな赤い薔薇の花が、私に語りかける。薔薇のことば、花ことば、……。人間の言う花ことばではない。人間が花に語らせようとする花ことばではなく、この花自身が語る花ことばを、この花はささやきかける。そのことばにひたされて、私は今、何かしらとても快適で幸福だ。私の心と体のなかのもっともこりかたまった部分、もっとも暗い部分にまで、花のことばがしみとおる。私という存在が、この花のかなで不思議なハーモニーに染めあげられ、私は今、自分自身が一個の花になった思いだ。慎重と誇りがかねそろえ咲く一個の花になったような私。あるいは、ひよつとすると、この赤い薔薇の花は、今はもう私に語りかけているのではなく、むしろそれ自身が私となって、それ自身の存在を宇宙にむけて語り出しているのではないか、……。この花は、私をとおして自分の歌を歌っているのではないか、……。私を用いて自分の歌を歌わせようとしているのではないか？——私に満ちて、その私においてあふれる花のことば、……。この花のことばに聞き入ることの幸福は深い。ああ、それにしても、私は、この花の声、花のことばのこちよい響きのなかにいつまでもこのように幸福にとどまりつづけることができるわけではないのだ！

それでも今は、沈黙のなかで語るこの花のことばに耳をかたむけよう。沈黙のことばを聞きとることのできる耳、——もちろんそれは、私という存在、私の存在だ。ほかに何か沈黙のことばを聞きとる耳があるだろうか……。小声を聞こうとするときに耳をすませるように、私の存在をすませて花のことばを聞きとろう。私は、私の存在をすみきらせることなしには、花の声、花のことばの響きを感じできない。私の存在をすませ、私を得体の知れぬそのもっとも素朴な姿に返してやって、こうして私を純粋なものに保つなら、……。そら、……。そら、……。聞こえてくる、たしかに聞こえてくる。私には今、花のことばが聞こえる。聞こえる。今たしかに聞こえるこのことばの意味を、人間のことに翻訳し、人間の住む意味世界に移植し、人間の治める国に住まわせるなら、そのとき私は、この花の声、花のことばを、私という存在、私という空洞のなかに、永く永く響きわたらせることができるのだろうか。（また、そのとき私は、花のことばを聞くというこの体験を、人間のことばを知るすべての者たちと共有することができるようになるのだろうか。）——何だって？ 意味？ 薔薇の語る花ことばの意味だって？ この薔薇の語る花ことばに、人間の語ることは、私が今用いている人間のことば

北岡 崇

に翻訳できるような意味はない。この薔薇は異言を語る存在だ。このことは、今、私の知恵の総体をもつてしても解読不可能な暗号だ。解読不可能であるのは、現に今ある私の知識がかぎられたものであるからではない。私の知識が今後どれだけ拡張されても、どれほど精密度を高めようとも、肝心要の私の知恵が今のようなものでありつづけるかぎり、花のことは、私には解読できない。人間のことはかたどられ人間の語ることばのなかに定住する私の今の知恵。このような知恵でもこれを上手に《活用》すれば何とか花のことばを解読できるなどと私が考えたとすれば、それは甘い愚かな考えというものだ。あるいは、見のほど知らず、思いあがり、知ったかぶり、要するに一種の傲慢というものだ。とはいふものの、ほかならぬこの薔薇の語る解読不可能な異言が、今、私の存在に浸透し、私の存在に満ちて、私の存在の全体に響きわたる。解読不可能だとはいえ、このことは、この暗号は、私にとって今、このうえない明証性をもつ。このことは、この暗号は、今の私の知恵の総体の放つ光量をはるかにしのぎ光り輝く。この薔薇のことは、その意味を人間のことはへと解析しようとするこの私の目には、光り輝く疑問符だ。

疑問符、……。だが私は、このことばをもっと知りたい。それが人間のことはかたどられているのではないとしても、それならそれで、今の私の知恵をきれいさっぱりすべて投げ捨て、このことばに親しみ、いつの日か、私自身このことばを自在に用いることができるようになれないものだろうか……。そうなれば、私は、この薔薇と本当に一つになって、この薔薇のことばと同じことば、その律動と同じ律動の支配する大地、人間のことは彼方に広がる存在の大地、人間の住む国々（社会）の彼方で、至福の時を生きることが

できそうな気がするのだが……。——だが、さて！ 薔薇のことは自在に用いるだって？ ……もちろん今の私には、そんなことできるわけがない。私は、今、自分の語ることばでさえ自在に用いることなどできない。それどころか、私は、いままでも、自分の語ることばを自在に用いることなどできなかつた。むしろ私は、私自身が語ることばに、あるいはまた他人が語ることばに、用いられてばかりいたのではないか。人間のことは用いられる私の知恵……。こんなやくざな知恵しかない私が、いつの日か薔薇のことばを自在に用いる境地にたちいたことができるのではないかと想像すること、これはただの想像とはいえ、やはり虫のいい想像ではないのか。人間の語ることばにかたどられた私のやくざな知恵がその日にはきれいさっぱり洗い流され、新しい私がおそらく一個の薔薇として誕生する……というこの想像そのものが、まさに今の私の知恵の愚かさによ来する愚かしい夢想ではないのか。愚かな知恵が、たわいのない夢想をとりとめもなくただ楽しんで、ひとりこちよい気分のなかにひたつていただけではないのか。本当はそうではないのだが、そうではないと、私が、ほかならぬこの愚かな知恵の私が言っても、それではという話ではあるまい。だが、夢であらうがなかろうが、愚かであらうがなかろうが、肝心なのは私に聞こえるこのことは。……それ！ ……聞こえる。聞こえる。今、聞こえてくる。薔薇の語る花ことばが聞こえてくる。このことばは《一語》たりとも私には解読できないが、たしかにこの小さな薔薇が私に語りかけている。薔薇はこうして異言を語り私の今の知恵の無力を私に気づかせる。

別に薔薇のことは聞き入ることなどなしに、私は、ひとり自分で自分の知恵をふりかえり、それがやくざで愚かなものだといふこ

とに幾度となく思いたったことがある。しかし、幾度となくくりかえされたそのようなふりかえりも思いたたりも、ほかでもないやはりこの私の知恵の働きたったのだから（と、そのようなふりかえりや思いたたりをさらにふりかえり思いたったのだが）、私は、次第に、自分の知恵をやくざで愚かなものと語る自分の知恵に——それがそれ自身のことをそんな風に語れば語るほどますます——信頼を置いてよいものかどうかからなくなっていくた。宙ぶらりんで頼りないこんな状況のなかにあつて、私は、何か足場を見つげようとしてしばしばつぶやいたものだ。私の知恵は、いろいろ欠陥があるということは否定できないが、それでもまんざら捨てたものでもなさそうだ、など、と。今なら、こうして私がしばしばたしかめようとした足場がゆるぎなくなつたしかな大地ではないことを、私は知っている。私が見いだした足場とは、ただの社会、一見ゆるぎなくたしかで強力で頼りがいがあるように見えはするが実は全体としてはそれ自身やはり不安定な漂流物でしかない社会、であつた。社会という動揺する水鏡のなかにぼんやりとゆらめき映る自分の顔を認めるような（また認めないような）この中途半端な自己了解。こんな風に自己了解するしか能のない私の今の知恵の根源的な無力に、私は、今、気づいている、……気づかされている。さまざまな欠陥にまわりつかれたかたむいていゝとはいへ、それでも結構しごとく立ちつづけようとし、できることなら直立しようとの努力さえしてきたこの健気で強情な私の知恵が、今、以前のようにな（元氣）に自分を主張しようとはしなくなつてしまつた。目の前のこの小さな赤い薔薇が、私の今の知恵の無力が根源的なものであることを私に思い知らせるのだ。自己主張の意志を強くおさえこまれた私の今のこの知恵は、いずれは（それほど遠くない将来の日に）全面的に

倒壊するにちがいない。何度も何度も自分自身をふりかえり自分のことをやくざで愚かと語りながらそれでも決して自分に見切りをつけることができなかった私の知恵、自分自身に何度も何度もかえりみられやくざで愚かと語られながらそれでもやはり仕方なしにはいえ（活用）されてきた私の知恵、人間の語ることばにかたどられたこのような私の今の知恵の無力を、今、私に語りかけるこの小さな赤い薔薇が、あざやかに明証する。私の知恵は滅びゆく。この知恵に導かれてきた私の生活も滅びゆく。この小さな薔薇のことばに耳をかたむけ光り輝く異言を聞いたかぎりには、私は、人間のことばにかたどられたすべてのものが滅びゆくものであるということを認めないわけにはゆかない。

滅びゆくものなら滅びるがいい。この知恵が、また私の生活が、そして人間のことばにかたどられたすべてのものが滅びゆくその時を、私は、清々しい、はれやかな心持ちでむかへたいものだ。もちろん私は、滅びゆくこの知恵にかわる新しい知恵をすでに何か手まわしよく手許にキープしているというのではない。引越しや着替へなら、新しい家屋、新しい衣服を準備しておいてから、そちらの方に身を移すというのがふつうのやり方。しかし、そんな風に知恵をとりかえることはできない。人生設計や日程表のなかに、一つの知恵の崩壊を位置づけることはできない。T・P・Oに依じて知恵をとりかえることもできない。（知恵とはわが身同様かけがえのないもの。）一つの知恵の崩壊は、その知恵に導かれてきた生活そのものが（人生設計や日程表やT・P・Oの判断もろとも）行き詰まり崩壊することでもあるからだ。たとえ私が、新しい知恵をあらかじめ準備しておこうとしても、その新しい知恵なるものは、私の今のこの知恵が考案するしかないのだから、やはりこの今の知恵と同

様に人間のことはにかたどられるほがなく、だから少しも新しくな
んかないということになる。とにかく、人間のことはにかたどられ
てはいないもの、人間のことはの彼方に存在するものだけが、新し
いことばにふさわしい。私がこの小さな薔薇のことばに耳を
かたむけ光り輝く異言を聞いたかぎりは、私の今の無力なこの知恵
とこの知恵に由来するすべてのものが（考案された新しい知恵なる
もの）崩壊にむかうものだということを、私は、認めないわけに
はゆかない。なるほどたしかに、私は、すでに今、この薔薇のこ
とばに耳をかたむけて、新しい知恵に触れている。（いや、新しい知
恵に触れられていると言うべきか）だが、たとえ私が新しい知恵
に触れ（られ）ているとしても、その接触において私は、この薔薇
のことば、聞こえてくるこのことばへの洞察をいくらかでも獲得し
たというのではない。天上に昇り日輪の炎から自分の炬火に火を移
し取りその火を持って人間の住む地に下ったあのプロメテウスや、
エホバ神に召されシナイ山に昇りゆきそこで授かった律法を携えイ
スラエルの民のもとに帰ったあの預言者モーセとは、私はちがう。
薔薇の語る花ことばが私に満ちる今、私はただ、光り輝く謎を見る
だけなのだから。この薔薇は、その色調も光沢も、香気も感触も形
態も、今、私の視力のとどこぬ彼方からの由来、闇からの由来を告
げている。闇を告知するこの小さな赤い薔薇。私の見るものが謎で
あるということは、それを見る私の知恵が無力だということ。その
謎がこのうえなく明晰な光り輝く謎であるということ。この小さな赤い
薔薇、この光り輝く謎、私に私の知恵の深い無力に気づくようにと
今語りかけるこの異言、……この新しい知恵。この薔薇の語りかけ
にもっと耳をかたむけよう。耳をすませてこのことばをもっとよく

聞きとろう。この花が何やらささやく場にこの身を保ちただただ慎
ましくこの花のことばを受け入れよう。——しかし、それにしても、
こうして今、薔薇のことばに聞き入る私は、この薔薇の語る花こと
ば、この薔薇の声を感知するというこのことのために、自分から進
んで何か努力をしたか？ 努力らしい努力を何かしたか？ たとえ
ば、五感を用いて注意深く観察するとか……いや、私はやっていな
い、……五感だけでは十分に観察することができないというなら五
感の機能を補強するさまざまな器具を用いるとか……いや、私は
やっていない、……いろいろな工夫をこらした実験を考案するとか
試みるとか、そんな努力を何かしたか？ 私はほとんど何もしな
かった。

この数日、……いやいや、もっと長い年月だったか……私は、
……思考という特異な生活に少し疲れていたのかもしれない……あ
る種の思考の型が怠惰な私を見捨てたのかもしれない……私におい
て遊動するさまざまな思想がおしなべて私には何か疎遠なもの、ど
うでもいいものに感じられる日々をすごしていた。物憂くけだるく
退屈な人間やことばや行動や物や事柄たち（社会的価値をもつ多様
な商品、あるいは社会的価値をもちたいと願うありとあらゆる種類
の商品志願者たち）にとりかこまれていて、楽しみや喜びや、そ
れだけではない、歓喜さえもが、物憂くけだるく退屈になる。今日
もまたその種のものにふさがれて、私は、うんざりするような時を
すごしていた、……いや、耐えていた、……耐える力をもって生き
ていたのだ。そこで私は、気がかりな病人を見舞うときのような気
持ちで、私自身のために、開きかけのこの赤い薔薇を花屋の店頭で
一本買い求めたのだった。この薔薇にいくらかの治癒力を期待して
いたのだろうか。三時間ほど前のことだ。茎を半分くらい切り捨て、

葉を何枚かむしりとり、透明なグラスに七分目近く冷水を入れてこの花をいけた。そしてそのグラスを机の上に置いて、薔薇を見た。この薔薇のことはをはじめて耳にしたのはそのときだ。このことは気づくやいなや、私、私という存在、私の存在は、変容した。薔薇のことは聞くために、そしてそのことにひたされるために、私は何か特別な努力をしたわけではない。この薔薇のことは——私——を——変える。そのときまでまるでたために乱反射し行き交っていた無数の反射光が、私の視野から突然かき消され、それと同時にそこに遊動していたすべての思想、すべての知識が無に帰したその瞬間、そこに残された私、裸形の私、私という空洞に、この薔薇の光がゆたかに注がれたのだ。それは、さながら、宇宙そのものである空虚な大伽藍が清められた大神殿の中心部にまで朝日がさしこんだかのようにあり、また、宇宙がはじめて暗闇のなかから音もなく新鮮な光のなかへと出現したかのようであった。この光、この薔薇のことはひたされて、私は喜んだ。喜びながら私は、沈黙のなかで、『ヨブ記』第三十八章第七節に記された喜びのことを考えていた。エホバ神が大地を創造したとき、「……夜明けの星はこぞって喜び歌い、神の子らはみな、喜びの声をあげた」ということはの意味がほんのわずかに理解できるような気がした。……この薔薇のことは、光り輝く異言に触れ（られ）て数分後、私は、しばらく客人の来訪を受けた。二時間近くにもおよぶ客人への応対、客人との対話。この薔薇と触れあっていたせいか、来客への応対の時としては楽しいひとときであった。その時間には、花のことはもう聞かえてはこなかったが、私は、ついさきほどこの花が語りかけてきたときの声をずっと覚えていた。幸福な夢からめざめたばかりの人がまだその夢の気配をひきずりながら半ばその夢が継続する時間のなか

にとどまり生きるということがあるが、私もまた、そんな具合に客人との対話の時間をすごしたのだ。とはいえ夢見る者ならいずれば現実へとめざめるものだが、私は、現実と呼ばれる退屈な夢から光り輝く異言・光り輝く謎という現実、著しい明証性をもつこの現実へといつとき覚醒したのである。とにかく私には、ある天才（と私が思う人）をその天才の書いた数多くの書物やその天才をとりまく歴史・社会的状況に関する豊富な知識にもとづいて論評するその客人の姿、科学や美学や哲学の諸問題について熱心に精力的に（科学的）な議論を展開するその有能な研究者の姿が、何かうさんくさく思われた。……こんな知識が、こんな知恵が、いつまでも立ちつづけていられるのだろうか、……これもまた崩壊へと突き進んでいるのではないのか、……この人はまだ気づいていないのだろうか、……。客人との対話は緊張を要するものであった。しかし、緊張を要求するわりにはそれほど——ついさきほどの薔薇のことはほどは——深い印象を残すものではなかった。客人との対話の後で、私はひとりこの薔薇のもとに戻った。するとこの薔薇はふたたび私に語りかけてきた。この薔薇の前に立つだけで、私はふたたび聞いたのだ、……この薔薇のことは、この薔薇の声を、そのときも、薔薇の語るこのことはを受け入れるのに、何も困難はなかった。何か特別な努力をしたわけではない。努力らしい努力など何もしなくても、工夫も実験も何一つおこなわなくても、このことは、この声は、まっすぐに私の存在に入ってくる。このことはすなおな受容ほど容易なものは何もないといいたいくなってしまうほどだ。（……本当は、まだそんなこと言える私ではないのだが。）私は思うのだが、多分この薔薇はいつもさわさわと、ざわざわと、語りかけていたのだ。耳ある者は聞け、目あるものは見よ、といった風に。私の耳、

私という存在がどうでもよいことどもから解き放たれば、いつでも聞きとることができるようにと、この薔薇はいつも語りかけていたのだ……。薔薇の語るこの花ことばは、あれこれ工夫したり、いろいろな実験を試みたり、さまざまな努力をした末にやっと聞きとることができるといったものではない。

工夫、実験、努力、などと呼ばれるものは、それが、何であれ人間のことばにかたどられた目的に適合するようたくみに仕組まれていなければならないほど、計算する知性の目に巧妙と見えるものであればあるほど、また、人間のことばの語る意味での熱意とか誠実さとかの美德に支えられたものであればあるほど、人間を、花のことばから遠ざける。人間のことばにかたどられた存在を手に入れることが目的である場合なら、計算のゆきとどいた工夫や実験そして熱心で誠実な努力こそが頼もしい。だが、頼もしいのはそんな場合だけ。では、人間のことばの彼方へとこの身を挺するときはどうだろう。人間のことばにかたどられてはいない花のことばを聞きとろうとするさいには、工夫・実験・努力などと呼ばれるものはまったくの役立たずだ、それどころかその聞きとりの邪魔をする。工夫・実験・努力などと呼ばれるものは、私という存在を、私の今の知恵に由来するあのでたらめな無数の反射光、種々雑多な思想や知識、策略とか企画とかたくらみとか計画と称されるがしこい欲望、等々、で満たし、窒息させてしまう。そんなときには、私という存在を、花のことばにあさわしい耳へととのえることはできない。虫めがねや物指、ピンセットや顕微鏡、試薬や数式や学説、その他もろもろを準備して、工夫をこらしあれこれ実験しさまざまな努力をおこなって、こうして花の声を聞こうとするのは、耳に栓を詰めて他者の声を聞こうとするようなものだ。耳に栓を詰めれば、なるほど自

分自身の思いはよく反省できる。しかしもちろん他者の声は聞かなくなる。いや、自分自身の思いの反省にしても、結局は中途半端な自己了解を得るにとどまりそれでおわり。本当は、他者の声を聞くことがなければ、私は私への反省を完成させることなどできない。私は以前、私の世界を他者の声による（攪乱）から完全に解放したいと願って、自分の耳に栓をかたくしつかりと詰めたことがある。そしてそのとき、私の耳は、詰めこんだ耳栓への毛細血管の反発で、心臓の鼓動や血流の脈動にわずらわされて、私とは何であるのか、私の世界とは何であるのか、聞きとることができなくなってしまった。他者の声に耳を閉ざせば閉ざすほど、私の生命を証するさまざまな（ノイズ）が私の反省の邪魔をする。そしてその反省は、中途半端な自己了解におわるのだ。もちろん、私という耳、私という存在が、さまざまな（ノイズ）、さまざまな私の想念に占有されたら、そこに他者の声の響く余地はない。他者のことば、他者の声を聞こうとするなら、私という存在から、他者の存在をからめとろうというたくらみのもとに考案されたありとあらゆる種類の道具、顕微鏡や望遠鏡や老眼鏡や補聴器や盗聴器や音波探知器や数式や形式論理や詭弁やレトリック、等、人間のことばにかたどられたすべての道具をしりぞけなければならない。人間が、自己と他者との媒介を託し自己と他者とのあいだに置いたすべての道具立てを自己と他者とのあいだからすっきり取り除いてしまえば、おそらく他者の声は聞こえてくる。さしあたっては、おそらく、光り輝く異言として聞こえてくる。この薔薇にしても、そのことば、その声は、すでにそこまでとどいていたようだ。私はただただ、その声に、そのことばに、私を解き放てばよかったのだ。それが、私のやったことのすべて、私がやらなければならなかったことのすべて。薔薇の

ことば、薔薇の声を聞くには、その異言を聞くには、それだけやれば、それで十分。特に困難な努力らしい努力が何か必要というわけではない。私のやったことはとても単純だ。とても単純で簡単なことだ。こんな簡単なことだが、これが、今日というこの日にいたるまで、私には、容易にできるものではなかった。

思い出してみよ！ 今は目の前のこの薔薇のことばに聞き入るこの私が、年毎の春、柔らかない若葉や咲き乱れる花たちが語りかけてきたとき、そのことば、その声に、私自身を解き放つことができたろうか、……私自身をどこまであけ渡すことができたと言のか……。頭上に燃えさかる夏空が大地と大地に成育する樹木とこの私に語りかけたことばを、私はどれほど聞き入れることができたと言のか……。深い秋の空に吹きすさぶ強い風、巨大な重量を成す無数の雲塊を秩序づけさざ波の立つ大河やいくつもの大渦を広々とした天空に造形する強い風、この風の語りかけに、私は耳をかたむけることができたか、……人間の呼吸など一気に奪い去るその強い風の語りかけを前にして、私はおじけづいたのではなかったか……。凍てつくような寒い日にひときわその声を高め語り出す生命の息のあたたかさに私はどれほど耳をかたむけることができたと言のか、……またそのあたたかさにどれほど感謝し、そのあたたかさをどれほどいつくしんだと言のか……。今思えばあのとき、花も天空も風も生命も、私に語りかけていたのだ。その身を私に寄せて、私に語りかけていたのだ。私に語りかけるそれらの存在たち——そこには幾人かの人間もふくまれる（人間もまた肝心なことはいたい薔薇や風と同様、沈黙のうちに語りかけるものだ）——を、私はいつも冷遇した。冷遇したというのは、私が天空のことばや風のことばや生命のことばを、人間のことに翻訳できなかったということ

とではない。翻訳できないそれらのことばを、翻訳できないからといって結局は無意味としてしりぞけるにいたったその性急さが冷遇ということだ。また、翻訳できないそれらのことばを無理やり人間の語ることばへと解析し去ろうとしたその強引さが、冷遇ということだ。その性急さもその強引さも、私の今の知恵、今は滅びゆくこととするこの知恵に起因する。光り輝く異言とむかいあうことやむかいあいつづけることをさけようとする私の今のこの脆弱な知恵、今は倒壊しつつあるこの知恵、に由来する。すでにあのとき、新しい知恵が私に触れていた。ほんやりとなら、私もそのことに気づいていた。しかし私は、あれらの存在たちとの接触の一点に発する波、新しい知恵の波が私の存在の隅々にまでおよぶようなことがないようにと絶えず気を配っていた。あれらの存在たちの語ることばが私につきささることがないようにと、あれらの存在たちの声が私に深い傷を負わせることがないようにと、絶えず警戒していた。やはり私は、私という空洞にあれらの声を響かせたいと心底から願ったこともなければ、私自身をあれらの存在たちへと完全にあげ渡そうとしたこともなかったのだ。あれらの存在たちとのつかのまの接触は、つかのまとはいえそれこそ私にとつてもっとも深く重い体験であるのに、私はその深さと重さにあさわしい存在へと私自身をととのえてはいなかった。私の知恵では測ることができず、人間のすることばでは語ることでできないその深さ、その重さを、私は、人間のことにばにかたどられた私の知恵の導きに従って、無意味とみなしたのだ。あれらの存在たちとの親しみを増し加え、みずから、あれらの存在たちと共生したいと心底から願うことは、やはり私にはなかったのだ。

私は何を守ろうとしていたのだろうか……。何をおそれていたのだ

ろう……。私が私の存在を解き放てばその声をもっとよく聞きとることができたらう存在たち、……あれらの存在たちが私をとりかこみ私に語りかけてきたとき、私は、なぜ、あれらの存在たちのことばを、私の存在をあげてむかえ入れようとはしなかったのか。うつとおしいほどしつこく私につきまとい私に語りかけてきたあの存在たちにしてもそのしつこさにおいて私に何かを訴えていたのにちがいない……。その語りかけが私にこちよく、しばしば私もそのこちよさにわれを忘れそうになって、あやうくこの身をひるがえしほっと一安心したりしたあの手強くも魅力的な存在たち、……。そうだ、……。この私が、今になっても、あのときのあれらの存在たちの語りかけをうつとおしいと形容したり、あの語りかけにあのとき急いで耳を閉ざしたことをあやうく身をひるがえすと言ったりするのは、なぜなのか？ うつとおしいのは、世間で現実と称されているあのさまざまな退屈な夢のことではないのか？ 危険なのは、その退屈な夢をそこからは決して脱することのできない唯一不動の現実と考えることではないのか？ 私の存在を、私が今この小さな薔薇の花に開放するように、私に語りかける何もものかへと解き放ちあけ渡すということが、あのとき私には、途法もなく困難なことに感じられた。自分自身の存在を他者にむけて解き放つというこの単純このうえないこと、何のことはない、私が今簡単にやっているこの程度のことが、あのときは、できなかった。なぜなのか？ ……人間のことばにかたどられたムラやクニやソシキやキカンなど十把ひとからげに社会と称される場において自力で生活していることを自覚する人間は、各人それぞれ、その生活の場で自分自身を有用かつ有益な存在とする何らかの能力を所有していると自認している。それは、自分自身を、自分が所有するその能力の点で、社会に通用す

る一商品とみなすことだ。彼が、社会においていっそう有用かつ有益な存在であろうとするなら、彼は、自分の能力を開発したり「活用」したりする努力を怠らず、その努力やその努力の成果を楽しみとし、また享受し、また誇りとするという考え方へとおのずと習慣づけられてゆく。こうしてすっかり社会化され商品化された人間にとつて、あの単純な行為、解き放ちという行為、自分自身を異言のざわめきにあげ渡すという行為ほど、困難なことはない。異言をわけのわからぬただのざわめきとみなす者なら、そんなあげ渡しは無意味でばかばかしい無駄な行為だと考えるだろう。また、異言のざわめきに光り輝く気配をいち早く察知する者なら、そのあげ渡しによつて自分の無力、貧弱、卑小、等が明証され、自分の楽しみが奪われ自分の誇りが傷つけられることになるかもしれないと心配する。私もまたそんな風に考えたり心配したりする人間の一人であった。自分の所有する（と自認する）貧弱な能力に執着し、その能力に束縛され、遂にはその能力に所有されて存在するという一商品の在り方に、私もまた、甘んじていた。そんな貧困、愚鈍、臆病、無気力、そしてまた執着、勤勉、楽しみ、誇り、業績へと私を導いていったのが、あの知恵、私の今の知恵だ。だが、この知恵は今、その根源的な無力を思い知らされ滅びゆくとしていく。私がこの小さな赤い薔薇の語りかけに耳をかたむけ光り輝く異言を聞いたかぎりは、私の知恵は、滅びないわけにはゆかない。

聞こえる、……聞こえる、……今、この薔薇のことばが聞こえる。……今は、私という空洞に薔薇のことばがこちよく響きわたる。今は、この響きのなかにあって、私は何かしらとても快適で幸福だ。……だが私は、このことば、この声のこちよい響きのなかにいっまでも幸福にとどまりつづけることができるわけではない。このよ

うな心持ちで、いつまでもこのことば、この声を、聞きつづけることができないわけではない。たとえ私が、光り輝くこの異言に、この耳を、この私という存在をかたむけて、そのこぢよい響きのなかにいつまでもとどまつていたいと願ったとしても、その願いは、おそらくかなえられない。私は今日、薔薇のことばにひたされて光り輝く異言へと覚醒した。だが、私がこの薔薇のことばを異言として、私の今の知恵には不可解な異言として聞くのは、私がまだ、私の知恵、私の生活を今まで導いてきた私のこの知恵を、捨てることできていないから。私の存在を可能なかぎり解き放ちあけ渡しても私が今この薔薇のことばを異言としてしか聞きとれないということ、私が今でも私のある一定の深みにおいてあの私の知恵でこの薔薇のことばを解析しようとしているということ。私の知恵が、薔薇のことばを、人間のことばへと解析しようとしてまだ働いているから、私は、薔薇のことばを不可解な異言として聞くのだ。今、私は、たしかにこの薔薇の語りかけに耳をすませて聞き入っている。……聞こえる。……今は、聞こえる。……今はまだ、聞こえる。……この薔薇のことばが、……この薔薇の声のこぢよい響きが。……しかし、私は、今でさえ、この薔薇のことばを、この薔薇の語るがままに聞いているのではない。私という空洞に響きわたるこのことばにおのれの無力を思い知らされた私の知恵、今や滅びゆく私の知恵は、まだ息絶えてはいない。この知恵が、今なお、私がこの薔薇のことばをこの薔薇の語るがままに聞くことをさまたげる。今、薔薇のことばにひたる私のこの幸福は深い。だが、この幸福はまだ、たしかなものではない。私は今日、光り輝く異言・光り輝く謎へと覚醒した。今日恵まれたこの覚醒を越えて、さらに深く、この薔薇のことばをこの薔薇の語るがままに聞く（本当にすなおに受容する）

という現実へと突入するまでは、私の幸福は不安定だ。私が薔薇のことばにひたされて今享受しているこの深い幸福もまだ不安定だ。私がさらに深く現実へと踏み込むまでは、近い将来に崩壊するにちがいないあの知恵、つまり私の今の知恵が、絶えず私を、現実と称されるあの退屈な夢のなかへとひきずりこもうとするからだ。薔薇のことば、そのことばの波が、そのことばを異言として聞くこの私に襲いかかり、私を呑みこみ、その波に、私が溺れ、どこまでも溺れ、私が死に絶え、私自身が無と化して、もはや私という空洞さえもあとかたもなく消え去り、そして私がそれと気づくこともないままに一個の薔薇として誕生するという恐るべき現実が出現するまでは、あの知恵、人間のことばにかたどられたあの知恵、滅びゆくあの知恵が、かたくなにつぶやきつづけるのだ。今は、あの知恵の無力を明証する薔薇のことばが聞こえる。このことばにひたる私のこの幸福は深い。だが、もつと深い幸福がある。たしかな幸福がある。それは、私がおはや私ではなく、それゆえ私にとつての薔薇も存在せず、むしろ私自身が薔薇であるときに、私がそれであるその薔薇に訪れる幸福である。人間のことばが滅び、異言が止んだときに、存在の語ることば、存在の歌う歌が、その語るがままにその歌うがままに宇宙に鳴り響くのを聞く耳の幸福である。だが、私はまだ、そのような耳へと成熟してはいない。そのような幸福にふさわしい耳へと、まだ成熟してはいない。私が私であることをやめ、他者が私にとつての他者であることをやめ、私が他者として誕生するという現実耐えうるほどに、私はまだ謙虚ではない。他者にたいする今の私の愛は、他者に訪れる幸福を、それこそが私の幸福として切望するほどにまだまだゆたかではない。この未熟、この強情、愛のこの欠如が、私が今享受するこの深い幸福のあやうさ、もろさ。薔

薇のことば、その光り輝く異言の響きにひたるこの私の幸福は、いつまでつづくのか……。この薔薇のことばへと覚醒した私は、あの退屈な夢のなかへと簡単にひきずりこまれたりはしない。人間のことばにかたどられた無数の虚構のいずれにも、以前のようにやすやすとは、私をひきまわさせはしない。だがそれでも、私は、人間のことばにかたどられたいつさいの道具を取り除きたただ慎ましく薔薇のことばに耳をかたむけようとするほかならぬこの私が、まだ、人間のことばにかたどられたあの知恵、あの道具のなかの道具を捨てることができるできないでいる。あの知恵が、私にとりついて離れない。あのやくざで愚かな、滅びゆくあの知恵が、私にとりついて離れない。私にとりついて、死んだ慣習でしかない人間のことばへと、人間のことばにかたどられた社会へと、私を葬り去ろうとする！

闘いが進行する。この薔薇のことばをもっと知りたいと願って人間のことばの彼方へと身を挺するこの私と、人間のことばにかたどられた知恵のつぶやきに耳をかたむける私と、……このひとりにしてふたりの私が、私と私の目の前のこの小さな赤い薔薇とのあいだに開かれたこの無限定な空間を戦場として、生命を賭しての闘いをくりひろげる。あの知恵にとりつかれた私は、非力だ。この非力な私にできることは一つだけ、現に今やっているこの一つだけだ。私自身が薔薇の語る光り輝く異言を聞く耳となり、その異言の響く空洞となること、この一つだけだ。私にもこれだけならできる。これだけは私がやらなければならない。私にはこれしかできない。しかし私は、あの脆弱な知恵にとりつかれた脆弱なこの私も、このように薔薇のことば、光り輝く異言に聞き入ることで、あの知恵、私の今の知恵に、その無力を明証し、その知恵を（またその知恵に導かれてきた私の今日までの生活を）崩壊へと駆り立て、すみやかに終

結させるのにいくらか寄与できるであろう。今はまだ、私は、目の前のこの赤い薔薇の語りかけることは、その光り輝く異言の響きに、こちよくこの身をひたしている。今はまだ、快適だ。私は幸福だ。私の今の知恵を終末へと駆り立てる私の闘いは、今はまだ、苛酷なものとなる気配を見せない。だが、私自身を戦場として私が私に敵対し闘うこの闘いは、私が無傷のままに終結する闘いではない。かならず、薔薇の語る異言が私につきささり私に傷を負わせ私に苦痛を味わわせる時がくる。だが、異言の時代に生きる私には、その傷、その苦痛こそが、幸福の源泉、私が今享受するこのこちよく快適な幸福よりもっと深いたしかな幸福の源泉である。その傷、その苦痛こそ、こちよさの彼方に私の幸福を求める私の情熱、快適さの彼方へと私を駆る拍車、待望するもっとも深きたしかな幸福の先触れ、至福の時の誕生を予告する喜ばしい陣痛である。

目の前のこの小さな赤い薔薇が、今はひときわ声を高めて私に語りかける。今はその輝きを一段と増し加え私に侵入する。——この声、この輝くことばを、この薔薇の語るがままに聞く耳はどこにあるのか。——そのような耳である詩人はどこにいるのか。